

氏 名 ・ （ 本 籍 地 ）	北 林 茉 莉 代（東京都）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	甲第 121 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 31 年 3 月 15 日
学 位 論 文 題 目	『宝物集』研究
論 文 審 査 委 員	主査 大 場 朗 副査 山 本 章 博 副査 森 晴 彦 副査 田 中 宗 博

北林 茉莉代氏 学位請求論文審査報告書

「『宝物集』研究」

論文の内容の要旨（1200字以上）

【論文の概要】

本論文は次の序結と三章（八節）から成る。

序 章 本研究の位置づけ

第一章 『宝物集』生成の過程 一片仮名古活字三卷本と第二種七卷本を中心に―

第一節 「白純王ト申王ノ名香ナリ」の背景

第二節 短い章句にみる片仮名古活字三卷本の性格

第三節 増補改訂する第二種七卷本の性格

第二章 広普山妙国寺蔵『宝物集』への展開 ―「草稿本」の痕跡―

第一節 妙国寺本独自本文考

第二節 「愛別離苦」構成考

第三節 妙国寺本の位置づけ

資料編 妙国寺本・久遠寺本対校

第三章 『宝物集』の後世受容 ―『類雑集』を手がかりに―

第一節 『類雑集』の『宝物集』利用

第二節 『類雑集』成立圏と『宝物集』流通圏

結 章 今後の展望と課題

以上が論文の構成となる。次に論文の要旨を章節にしたがって記してみたい。

序章では、作品の梗概や、作者説・諸本分類・諸本系統論について、研究史を整理する。『宝物集』は平安末期～鎌倉初期に平康頼が著したとされる仏教説話集で七十種を超える伝本があり、小泉弘氏の分類により、一卷本、二卷本、平仮名古活字三卷本、平仮名整版三卷本、片仮名古活字三卷本、第一種七卷本（以下、「元禄本」）、第二種七卷本に分類される。本研究は、この分類にしたがって徹底した諸本比較を行っている。従来の先行研究は二系統や三系統で論じることが多いが、本研究はほとんどの節で七系統を横断的に概観する点が特徴である。一・三・七の順に増広された「増補説」、七卷本から三卷本へ抄出された「抜書説」、幻の祖本から一卷本は抄出され七卷本は増広された説、開版の際に改変説などある中、本研究は増補説・抜書説両説について検証している。

第一章では、諸本比較から、諸伝本、とくに片仮名古活字三卷本と第二種七卷本の性質を把握しつつ、成立過程を検討する。

第一節では「釈迦像の由来」の段の意味不通箇所を取りあげ、七系統十種の諸本における固有名詞の誤りから『晋書』等の歴史書を参照しておらず、「白純王ト申王ノ名ノ名香ナリ」と「白純王の名も不審なきにあらず」の異同は、「名」と「審」の草体誤写と、敬語表現、評語が影響すること、脱文を多く有する九冊本は良質な本文ではないことを指摘する。

第二節では「十二門開示」の前半部の誤りを掲げ、六例の考証から、誤謬が生じた理由を、①事実誤認、②漢字の草体酷似による誤読、③平仮名の草体酷似による誤読、の三種類を結論する。誤

りを犯す片仮名古活字三巻本の性質と、親本が平仮名本であったことを指摘する。

第三節では「十二門開示」の後半部に見られる例証話の入れ替え基準や、大幅な増補の実態、經典引用態度を考察。話型を同じくする三つの説話、片仮名古活字三巻本「布施」の無勝童子・徳勝童子説話、同「善知識」の妙莊嚴王説話、第二種七巻本「布施」の檀弥離長者説話を検証。その結果、文脈や「十二門開示」の意図に沿うよう例話が精選されることを明らかにした。また「観念」の段の全文比較ならびに依拠文献整理の結果、第二種七巻本では、本文の分量が片仮名古活字三巻本のおよそ五・九倍、依拠文献は『涅槃經』一書に対して大乘經典など二十三種の書名に増えることを指摘し、増補説でなければ説明がつかないことを明らかにしている。

第二章では、未開拓資料である妙国寺本（巻三零本）の諸本系統への位置づけを目的に本文比較を行っている。この伝本は和歌の総数から第二種七巻本系統とされるが、独自本文や歌順の乱れなどの問題が残る。一巻本の痕跡が残るのも特色である。この妙国寺本を検証し、伝本の傾向と一巻本の重要性を指摘する。

第一節では、妙国寺本の書誌情報、先行研究を紹介。妙国寺本の独自本文を考察した。七系統すべてに共通する義孝往生譚を考証し、一巻本・妙国寺本のみが逍遙の場面を有することを指摘する。また、二五七番歌「ウタヘネノ」を二度載せるのは試行の痕跡と考える。これらから〈妙国寺本草稿本説〉の証左を報告している。

第二節は、第一項で五首一群の和歌や例証話を導く導入部（以下、「見出し」）の検討を行い、第二項で「愛別離苦」の構成を考察している。見出し「冒頭」は①一巻本の見出しが細かく分解される形で後出本の別項目へ移動すること、②一巻本見出し語末尾の「愛ノワカレ」は独立の項目ではなく定義説明であること、③地名や引き歌表現から一巻本「鈴鹿山」、三巻本「小夜ノ中山」、七巻本「白河の関」となり、最終的には「東下り」を描くことなどの、本論文は新解釈を提示している。見出し「名越の祓」では、①妙国寺本独自本文「アサノヲエタニユフカケテ」が「けふくればあさのたちえにゆふかけてなつみなづきのみそぎをぞする」の引き歌表現であること、②「イルヒ」であるべき一八二番歌の結句を「イズルヒ」と誤る妙国寺本の親本は、和歌を平仮名表記していたこと、③見出しと和歌の対応関係は諸本共通であること、などを明らかにした。第二項では、「愛別離苦」の構成を考察。「ヒルノワカレ」「流罪」「入涅槃」を取り上げる。従来「昼」と解されていた一巻本「ヒルノワカレ」は「鄙」と解すべきであることを指摘する。「流罪」では、①一巻本に存在した「流罪」の項は後出本では削除、②康頼の二二三番歌は前項と次項をつなぐものとして配列基準を無視した形で配され、③その理由は、和歌によって赦免された康頼と雁書によって虜囚の身を解かれた蘇武譚に親和性を見、それが理由であると想定している。さらに「入涅槃」の記述の考察も加え、①一・三・七の増補の順番での増補跡が認められること、②妙国寺本は第二種七巻本系統諸本において唯一、二八四番歌を欠く四首一群であり（他の諸本は五首一群）、草稿本説の妥当性を指摘した。

第三節では、「帰雁」「親におくる」「子におくれて」各項目の五首の歌順を、七系統十四種の諸本をとおして比較する。この歌順表から、妙国寺本は、五首の冒頭に勅撰集を置く〈和歌配列基準が確定する前段階の本〉と推断している。

第三章では、後世受容例として『類雑集』を取りあげ、依拠した『宝物集』の伝本を久遠寺本親本と特定している。また、『類雑集』の書肆・出典・表現を手掛かりに成立圏を探り、同時にそれが『宝物集』の流通圏であったことを指摘している。

第一節では、先行研究の指摘をする『宝物集』を受容した日蓮遺文などの後代文学を俯瞰し、『類雑集』の先行研究を整理、和歌の出典考証を行っている。『類雑集』研究で基盤となるのが牧野和夫氏の日蓮宗を制作圏とする論である。『類雑集』の和歌の出典を調査し、七首が『宝物集』と明記される和歌であり、他一首に『宝物集』の影響が看取される。『類雑集』が拠った伝本は、集付けの一致度から久遠寺本に連なる一本と考えられる。現存する久遠寺本は、日意による抜書本であるため、抜書以前の親本か、同じ親本から派生した兄弟関係にある伝本を想定できると指摘。また、書名と腰の句「ウレタキハ／サビシキニ」の併記は、『法華初心成仏抄』のうち行学院日朝の「朝師本」に依拠するものであることを明らかにする。日蓮宗総本山久遠寺にあった書籍を閲覧できる人物が『類雑集』の制作に携わっていることを指摘する。

第二節では『類雑集』の成立圏を確定するため、書肆の研究を確認した後、敬語表現・注記表現を分析している。『類雑集』慶安四年版の版元である「石黒庄太夫」は日蓮宗寺院の一つ本能寺の敷地内で発生したこと、明暦三年版の版元である「秋田屋平左衛門」は石黒の近隣に位置すること、「秋田屋平左衛門」は『類雑集』以外にも石黒の後印本を刊行しており二者の交流が認められることなどを考証。次に約五〇〇例の敬語表現を抽出し、そのうち一五〇例が独自の敬語表現であること、五十五%の「釈尊」に十四%の「僧」が続くが、この「僧」二十一例中十三例が日蓮および日

蓮宗関係者への敬意であること、注記表現では、日蓮著作および日蓮宗関係者の著作が多く挙げられること、順徳天皇の歌学書『八雲御抄』に「コ」と振るのは日蓮宗の慣習的な読みの影響であること、を指摘。これらから『類雑集』の成立圏は『宝物集』の流通圏と一致することが理解できるとする。

結章では、全章を総括する。

資料編では、関係把握の一助とするため、妙国寺本と久遠寺本の全文対校を行っている。

審査結果の要旨（1200字以上）

【審査結果】

『宝物集』は中世初頭に成立した仏道への手引書である。この作品は作り物語の手法を用いて、作中に一人の僧を登場させ、この僧が在家の人々に仏道とは何かを具体例をあげながら平易に説くという設定で書かれている。仏教全般を体系的かつ平易に祖述しているところが受けて、近世末まで仏教の入門書として読みつがれてきた優れた古典である。

北林氏の論文はこの『宝物集』を取り上げ、その生成・展開・受容という視座から種々の問題点を析出して解明を試みたものとなっている。『宝物集』には一卷本、二巻本、三巻本、七巻本等の諸伝本が存在し、その生成と展開に関する様相は複雑であり、定説をみるに至っていない。本論文はその諸伝本を精査して、それぞれ相互関係や伝本成立の経緯について論及したものに、後世における受容の考察も加えて、約八四八枚（四百字）の論考にまとめたものである。

北林氏の研究手法は、諸伝本の本文を徹底的に精読し、そこに潜在する種々の問題点を的確に剔抉し、作品の内外から取り出してきた豊富な例証と比較しつつ結論に導くという手堅い文献学的方法を貫いている。このため論拠、論旨は明快で説得力に富んでいる。したがって、本論文が抽出して解決に導いたところが少なくないものである。

はじめに口述審査の結果を記すことにする。口述審査では概ね研究成果は評価されたが、次のような指摘も出た。細密にわたる実証的態度は大いに特筆すべき姿勢である。研究史の手薄なところを補う研究で、論者が引用した典拠や出典調査は今後も利用できる。研究史を押さえた上でニュートラルな立場から各説を検討しているところもいい。先達の誤謬を正しているところなど評価できる。これだけの長さで考証を続け、結論に至る過程もいい。など良い点の指摘もあったが、一方で、一学術論文程度の限定した長さにまとめることも必要ではないか。誤字がまだ残るところは修正する必要がある。世界観や草子地など概念の規定や運用方法が既にあるものについては、語句は慎重に使った方がよいのではないか。「見出し語」という使い方より「見出し」でよいのではないか。系統の呼称が章によって差異があるのは意味があるのか。辞書は注でよいのではないか——などについて指摘されたが、全体的には先行文献をぬかりなく渉猟し、数々の新見解を打ち出した論文であると認定された。

次に本論文の独創的な点を指摘しておきたい。まず、全体として特筆できるのは、二系統や三系統の本文批評ではなく、現存の七系統のテキストに対しての本文批評をする点である。

第一章では片仮名古活字三巻本の「名香なり」が草体誤写から生成されることを証明し、①事実誤認、②漢字の草体酷似による誤読、③平仮名の草体酷似による誤読の三種類である。ここから、〈誤りを犯す片仮名古活字三巻本の特質と、親本が平仮名であったことを導き出す。また、片活三本と第二種七巻本の「観念の段」に着目して、第二種七巻本は本文の分量は片活三本のおよそ五・九倍、依拠文献は『涅槃経』一書に対して大乘經典など二十三種の書名が挙げると指摘する。これらから第二種七巻本増補説でなければ説明がつかないことを証明する。〉

第二章では妙国寺本を検討し、一卷本の歌が残ることや歌順が整えられていく過程であることを指摘し、一卷本→片活三本→第二種七巻本という過程でなければ成立しないであろう和歌や記事の増広過程を検証している。

第三章では、後世受容の一例として『類雑集』を取りあげ、これが依拠した『宝物集』が現存の身延山久遠寺本（抜書）と一致し抜書の元になった親本を利用しているのではないかとということと、これらの書物が日蓮宗関係寺院でのものであること、久遠寺本の範疇と重なる場所の寺院蔵書が用いられているであろうことなどを導き出し、『類雑集』使用の『宝物集』の伝本を特定した。また、名著として名高い小泉弘氏『古鈔本宝物集の研究』（昭四八）で久遠寺本にある集付を「葉門集」と小泉氏は翻刻し、諸研究もそれを踏襲しているが、「桑」であり「桑門集」であることを指

本論文は前述したように実証主義的研究の王道である本文批評を用いて『宝物集』諸本に挑み、丁寧な本文批評によって本文異同と誤謬の生成過程を明らかにし、同時に諸本の成立にまで言及する堅実な研究である。また、精力的な資料・先行文献の収集ならびに考証によって少なからず種々の研究を進展させる発見をし、成果をあげているものである。全体的に俯瞰するならば、若干の不備はないわけではないが、これらは、前述した数々の発見や成果の前には軽微な瑕疵というべきであろう。それを上回る成果が本論文には認められるのである。本論文は総じて先行研究をもれなくおさえ、それを出発点として批判的に活用しつつ地道な実証的研究姿勢によって大きな新見解を生み出してきた労作と認めることができる。

公表予定

日 程	平成 年 月 日
公表形態	①掲載誌名：【 】 【 】号・巻 【 】頁 【全文・要約】
	②単著（発行者）
題 目	<※タイトルを変更した場合>